

素人小説

第 13 回 「後継者選び」



株式会社 BSO

1第13回「後継者選び」

- ・ 親父の死
- ・ 鈴木専務の発言
- ・ 山田の歩み
- ・ 情けない自分
- ・ 山田の周囲
- ・ 後継者決定
- ・ 後継者候補の動き
- ・ 一応の卒業
- ・ 山田専務の発言

親父の死

山田俊和が社員220人を擁する親父の事業を継いだ時、37歳であった。親父の死は64歳で突然であった。本人もこんな風に早死にすることは考えていなかったようで（むしろ、親父は永久に経営者を続ける気でいたのではないかと今でさえ思うようなことがあった）、後継者を誰にするかなど、勿論白紙の状態であった。

山田の歩み

そのとき、山田は常務で営業本部長になったばかりであった。親父の会社に入って、経営者の息子の大半が経験するように各部署を2〜3カ月程度、期間実習という名目でまわった。その後、製造係長を皮切りに、技術の課長代理、資材の課長、営業の第三課長、次長、九州支店長、本社第一部長という職歴をそれぞれ短期ではあったが、そつなくこなした。山田は九州支店長になってしばらくした時に取締役になった。そして営業本部長になると同時に常務に昇格した。

大学を出て2年程「他人の飯を食う」経験をした産業人としての最低の教育を受けただけで、管理者とか経営とかについては、全く学ぶことも経験することにもならなかった。

山田の周囲

親父が他界したとき、山田の上には親父の弟で叔父に当たる59歳の山田亀吉が専務でいた。山田専務は、製造・資材を主に見ていた。専務は親父と一緒に会社を伸ばして来た実力を持っていた。また、本質を捉え直球を投げてくる専務は、社員から恐れられていた。山田にも容赦ないこの叔父に恐怖にも似た気持を持つこともあったが、どこか頼りにしていた。

また、母の弟の田島裕三が総務・経理担当の役員であった。彼は親父にとって忠実な番頭であった。いつも親父からムチャクチャに怒鳴り散らされていたが、大人しい田島は生きていく証のように受け止めていたようだった。

営業担当役員で創業当時からいる57歳の鈴木専務は、中卒で社会に出て1年も経たないうちから、親父の仕事を手伝うようになった。猪突猛進型の人間である。また責任感の強い男でもある。それだけに怠け者を徹底して嫌うし、自分が会社をここまで伸ばして来たという自負があり、他人の話しに耳を貸さないどころか、自分の考えを押し通す人間であった。

後継者候補の動き

トップの突然の死で、会社は混乱した。いや、会社だけでは無い。仕入先、銀行など外部との関係も穏やかではなかった。表向き、親父の葬式の段取りと事業継承を同時にやらなければならぬバタバタであったが、全ての人の関心事は誰が次の社長になるかということだった。専ら山田専務と、鈴木専務のどちらかがなることの話だけで、山田の名前は殆ど出なかった。

山田は役付役員と言ってもまだ正直なところ「見習」と言う立場であった。叔父の山田専務は、親類を代表して葬儀を取り仕切った。仕入先や銀行などへの話しも山田専務が一人で対処した。

このような話のなかで、山田専務は「後継者は山田俊和」と笑いながら話をした。その話し方を見て、聞き手は冗談としてしか受け止めず、山田精密工業株式会社は基本的にはいままでと殆ど変わることはないとの感触を持った。

鈴木専務は、この混乱に乗じて同業で若干規模が大きい大洋工業に仕事を取られることを危惧し、チャンスに転換すべく、得意先を勢力的に回った。鈴木は回っているうちに予想以上の成果が出る感触を持った。先代が無くなった今、自分の実力が思った以上にある事を感じた。鈴木は自分が新社長になるのが最も望ましいと思うようになった。受注状況

を幹部会議で報告するだけでなく、「先代がいなくても事業は伸びているし、益々わが社は業績の良い会社になっている」ということを社内のあるゆる部署に伝えていた。外回りの合間を見ては頻繁に田島を連れて社内に顔を出すようになった。

山田は、周囲がバタバタするなかでこれと言ってすることも無く時間が過ぎていくのを感じながら、自分が後継者レースに参加させてもらっていないことが寂しかった。しかし、一方で自分が後継者になって親父と同じように経営できるか自信が無かった。複雑な気持ちであった。

動機はどうであれ、会社の非常事態に対する両専務のテキパキした行動には頭が下がった。またこの時期に対外的評価や受注増といった成果をかつて無いほど出したのには驚いた。山田は自分ではなく、二人のうちどちらかが新社長になるのが最も望ましいと思うように考え始めた。どちらでも良いと思った。

山田専務の発言

親父が亡くなったとき、取締役内規の通り、山田専務が社長代行をしていた。初七日が終わった晩、山田専務は臨時取締役会を正式に召集した。

取締役会は山田専務、鈴木専務、田島取締役、それに山田俊和と母の登美恵の5名である。山田専務は開催冒頭で先代がわが社を業界トップにした後に引退を考えていたことを打ち明けた。そして俊和常務が後継者として相応しいかどうかの確認ができるまで、後継者を白紙にしておきたいことを伝えた。先代が悲願を遂げず他界されたことの残念さを語るとともに、先代が意図した状況での後継者選びでないことの苦悩を話した。

今の段階で先代の意向に最も近い後継者は鈴木専務であることを伝えつつも、山田専務は穏やかな口調で鈴木専務に話しかけた。「我々が協力し、先代の悲願を俊和常務に果たさせたい」と。

山田俊和は自分の耳を疑った。俊和の母も予想外の発言に、鳩が豆鉄砲を食らったような顔をしている。田島は下を向いて困り果てた様子であった。

鈴木専務の発言

後継者に最も相応しいと言われたときはいつもの顔付きであった鈴木専務だが、次の常務の後継者にとの発言で顔色が変わった。大分時間が経ったように山田俊和は感じたが、後で田島から聞いたのでは一瞬の時間だったそうだ。鈴木専務はいつもの話し方よりちょっと甲高い声で話し始めた。「わが社は先代の悲願でもあるように、いま事業を拡大して

行くことが最大のテーマであり、これをやれるのは自分が一番適している。また、先代が他界された今、我々の力で業績はさらに良くなっていつている。私を中心に今まで以上の協力体制で事業を伸ばし、先代の恩に報いたい。そして、先代の悲願を果たした暁には俊和常務にバトンタッチしようではないか」と。

情けない自分

鈴木専務の話物を物静かに聞いていた山田専務がまた話し始めた。「確かに、鈴木専務の意見が最もである。ただ、二人とももう60に近く、これから急激に肉体も気力も衰えていく。いずれは俊和常務に社長はやってもらわないと困る。我々がやった後では、俊和常務も40を過ぎ、下手したら45を過ぎることになるかもしれない。若さを出せるときから社長として動いてもらいたい。未熟さで失敗しても、今なら我々がカバー出来る。いま失敗して、のち強くなるのが将来の山田精情密工業にとっては重要である。万が一、俊和常務がトップとして相応しくないようであれば、我々が元気なうちは、後継者を他に求めることもできる。」と。

山田専務は長々と話をした。鈴木専務も将来のことを考えると山田専務の話が当を得たものであると考えるようになっていた。

それに引き換え、山田は若輩とはいえ、未熟と言われ、自分のことで二人がある意味では命がけで話しているのにも関わらず、話しの中に入れないことに、自分が情けなかつたし腹が立った。

後継者決定

大方の予想に反して、山田俊和が新社長に決まった。山田俊和は山田専務と鈴木専務に自分について真剣に議論してもらったことに感謝すると共に、未熟な自分の後見人を心からお願ひした。二人に厄介をかけずに山田精密工業を経営し、安心して見てもらえるようにすることで、お返しすることを誓った。

両専務は役職名をそのままにするよう強く求めた。自分たちが経営するのではなく、新社長のもとで、担当部門で今まで以上の役割を果たし、新社長と二人三脚を組む経営陣の育成をサポートするためには、このままのほうが良いということであった。山田俊和は、素直にこの意見を受け入れた。

一応の卒業

山田俊和は、両専務に3年の時間をもらうことにした。この期間、色々なことがあった。そして、3年が過ぎ、「自分達の役割は終わった。社長はこれから一人でやっていける。我々は安心してこの決算で引退出来る。」と申し出があった。山田俊和は自分が社長としてはまだ未熟だと思っている。しかし、これ以上、両専務に頼りっぱなしでは自分の果たすべき役割を命がけで全うするようになれないと感じていた。

両専務の言葉を有難く貰うことにした。これから一人で太平洋に乗り出す小船のような自分を感じ武者震いがした。誰でもいつかはこんな時期があるのだと言い聞かせて、山田俊和は決算取締役会に出席するために席を立った。

おわり